

『嗣徳聖製字學解義歌』中の字喃における字形の特徴 —義符による同音異義語の区別と正字・俗字意識—

伊澤亮介*

滋賀短期大学 ビジネスコミュニケーション学科

Some features of Nom forms in “Tự Đức Thánh Chế Tự Học Giải Nghĩa Ca”

- The use of semantic components as a distinctive index to distinguish homonyms and the awareness of the use of formal and informal characters –

Ryosuke IZAWA

Department of Business Communication, Shiga Junior College

抄録：字喃（チュノム：Chữ Nôm）には同一形態素に対して複数の字形が存在し、「俗字」や「略字」も含め、複数の字形が同一資料中で交替するという現象はめずらしくない。著者は以前、民間伝統劇の台本であり写本の『長山遺祿』と民間文学のテキストで版本の『西遊伝』中の字形の交替について分類、分析した¹⁾が、本稿では、それらとの比較のため官製辞書であり版本の『嗣徳聖製字學解義歌』を取り上げその字形について調査した。

その結果、義符と声符の位置の交替という現象は他の二資料と同じく頻繁にみられる一方で、『嗣徳聖製字學解義歌』には、義符を使い分けることで同音異義語を区別するという特徴と、使用される字形の「正字」と「俗字」を分け、極力「正字」を使用するという特徴がみられた。

キーワード：字喃（チュノム）、俗字、字形、義符、声符

1. はじめに

字喃には、同一形態素を表す字形が複数あることが知られている。例えば、Nguyễn, Quang Hồng, eds (2006)には、trời（意味：空、天、神）という形態素に対して、「𠵼」「𠵼」「{-*例}¹⁾」「𠵼」という四種類の字形を採録している²⁾。そして、このような複数の字形は同一資料内でも交替するが、その現象について中心的に取り上げた研究は多くなかった。字喃の字形について、Nguyễn Tài Cần (1985)³⁾、Nguyễn Quan Hồng (2008)⁴⁾や Vũ Văn Kính (2009)⁵⁾など諸先行研究の多くは、それぞれの字喃の構造を精緻に分類した研究が中心であった。それらの分類は基本的に漢字の構成を分類した六書を基に考え

¹⁾ フォントにない字形の表し方について、{A+B}はAとBが左右に隣り合う字形を、{A*B}はAとBが上下に組み合わされる字形を表すこととする。

られたものである^b。しかし、最近では、それぞれの構造をもつ字喃が同一資料中にどれくらいの頻度で出現するかを分析した Nguyễn Tuấn Cường (2012)⁶⁾のような研究もなされるようになってきた。その研究によると、実際に資料中で使われる字喃は、先行研究の詳細な分類表から受ける印象とは違って、ほとんどが仮借と形声の字形のみである。また、清水 (2017)⁷⁾にも、「漢字を同意のベトナム語で読み上げた「訓読み」の例はほとんどみられない」とある。このように、同一資料中で使われている字喃の種類の種類から実際の字喃の使用について探る研究がなされている。

本研究も、従来の詳細な字喃の分類からは離れて、実際の資料中での字喃の使用状況を、字形という観点から探る試みである。

2. テキストと研究方法^c

2.1 『長山遺録』 Chàng Sơn di lục

字喃で書かれた写本である。内容や形式から民間の劇の台本であると考えられ、避諱文字の使用状況から19世紀半あるいはそれ以降に書かれたものであると推定される。

2.2 『西遊傳』 Tây Du Truyền

全編字喃で書かれた版本であり、ここでは、維新六年(1912年)の廣盛堂蔵板を使用した。民間文学の範疇に入る資料である (Kiều Thu Hoạch 2014)。

2.3 『嗣德聖製字學解義歌』 Tự Đức Thánh Chế Tự Học Giải Nghĩa Ca

嗣德帝(在位:1847-1883年)の命により編纂が開始され、その死後、成泰十年(1898年)になって刊行された、『康熙字典』を基につくられた漢越辞典。類書のスタイルで部門別に配列された漢語を字喃で解説している。

字形の規範化に関しては、『嗣德聖製字學解義歌』の編纂を命じたとされる、阮朝三代目の皇帝である嗣德帝の時代には公文書に使われる漢字の字形についての規範化に関する記述が『國史遺編』の中に見える(『國史遺編』集中 大南紀 聖祖仁皇帝)。

研究方法として、同一形態素を異なる字形で表している箇所を挙げ、その分布状況を調べた。その上で、変化の特徴によって分類し、そこから読み取れる字喃使用の特徴について考察した。次に、正字と俗字の使用について、一方で正字を用い、他方で俗字(略字)を用いている語を取り上げて比較した(第5章の表)。

^b 伊澤(2019), 6ページの表を参照。

^c 『長山遺録』と『西遊傳』については、伊澤(2018)⁸⁾及び、伊澤(2019)に詳述したので、ここでは簡単な紹介にとどめる。

3. 各資料に共通する字形の特徴

形声の構造をもつ字喃における義符と声符の位置の交替はいずれの資料にも共通して見られる特徴であった。以下に出現例を表にして示す。(表中の/は義符と声符の位置の交替,あるいは義符の種類
の交替を示す。)

『長山遺禄』

<左右の交替>

a. trước	𠂇(5)/𠂇(3)	義符：先	声符：畧(漢越音: lược)	意味：前(に)
b. thẳng	𠂇(3)/𠂇(1)	義符：直	声符：尚(漢越音: thượng)	意味：真直ぐ
	𠂇(1)/𠂇(1)	義符：正	声符：尚(漢越音: thượng)	
c. tên	𠂇(5)/𠂇(2)	義符：名	声符：先(漢越音: tiên)	意味：名前
d. ngày	𠂇(7)/𠂇(1)	義符：日	声符：碍(漢越音: ngại)	意味：日
e. năm	𠂇(6)/𠂇(1)	義符：五	声符：南(漢越音: nam)	意味：五
f. hay	𠂇 ^d (8)/𠂇(1)	義符：能	声符：哈(漢越音: thai)	意味：～かどうか
g. sao	𠂇(6)/𠂇(4)	義符：何	声符：牢(漢越音: lao)	意味：どうして
h. dưới	𠂇(6)/𠂇(4)	義符：下	声符：帶(漢越音: đai)	意味：下(に)
i. sống	𠂇(3)/𠂇(1)	義符：生	声符：弄(漢越音: lộng)	意味：生きる
j. ngay	𠂇(5)/𠂇(1)	義符：正	声符：宜(漢越音: nghi)	意味：すぐに
k. chịu	𠂇(3)/𠂇(2)	義符：受	声符：召(漢越音: triệu)	意味：受ける
l. chín	𠂇(1)/𠂇(1)	義符：九	声符：軫(漢越音: chẵn)	意味：九

<上下の交替>

m. chết	𠂇(2)/𠂇(1)	義符：死	声符：折(漢越音: chết)	意味：死ぬ
---------	-----------	------	-----------------	-------

<その他>

n. bé	𠂇(3)/𠂇(1)	義符：小	声符：閉(漢越音: bé)	意味：小さい
o. mở	𠂇(1)/𠂇(1)	義符：開	声符：美(漢越音: mỹ)	意味：開く
p. ra	𠂇(75)/𠂇(4)/𠂇(1)	義符：出	声符：羅(漢越音: la)	意味：出る
q. cửa	𠂇(10)/𠂇(2)/𠂇(1)/𠂇(1)	義符：門	声符：拳(漢越音: cữ)	意味：門扉

^d この字形の義符は「能」、声符は「哈」であるが、それぞれ一部が省略され、「𠂇」と「台」という形になっている。声符の字形を省略する現象は「省声」と呼ばれるが、例dの字形の声符「碍」が「𠂇」となり、例lの字形の声符「軫」が「𠂇」となるのも同じ現象である。

『西遊伝』

<左右の交替>

a. năm	𠵼 (7) / 𠵼 (1)	義符：年 声符：南 (漢越音: nam)	意味：年
b. ngày	𠵼 (8) / 𠵼 (1)	義符：日 声符：碍 (漢越音: ngai)	意味：日
c. trước	𠵼 (4) / 𠵼 (1)	義符：先 声符：畧 (漢越音: lược)	意味：前 (に)
<その他>			
d. cửa	𠵼 (7) / 𠵼 (1)	義符：門 声符：挙 (漢越音: cù)	意味：門扉
e. ra	𠵼 (13) / 𠵼 (11) / 𠵼 (6) / 𠵼 (3)	義符：出 声符：羅 (漢越音: la)	意味：出る

『嗣德聖製字學解義歌』

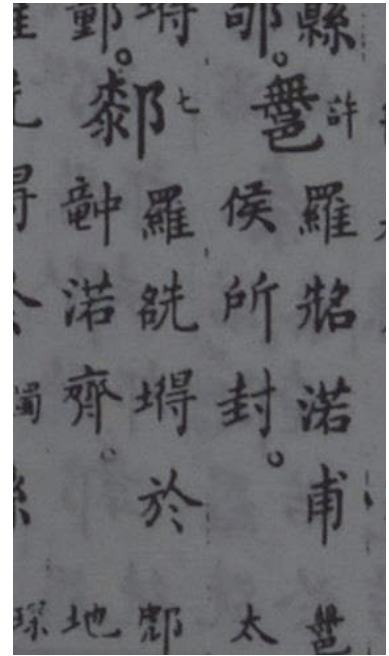
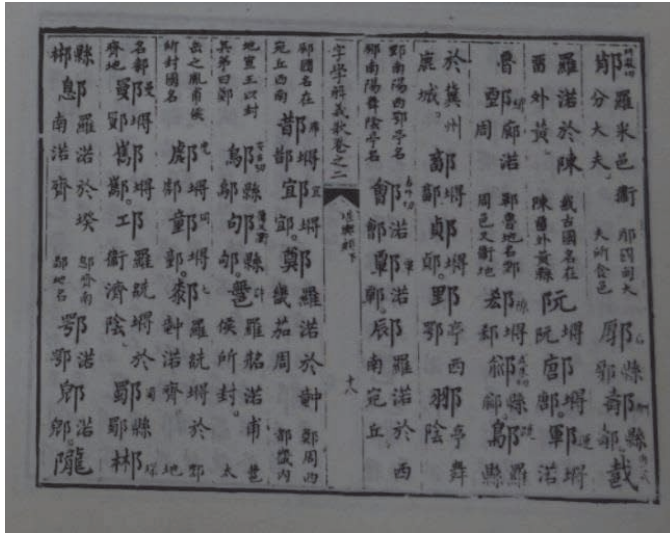
<左右の交替>

a. chen	𠵼 (3) / 𠵼 (2)	仮借的用法 𠵼 (漢越音: chiên)	意味：入り込む
b. dày	𠵼 (14) / 𠵼 (4)	義符：厚 声符：苔 (漢越音: dài)	意味：厚い
c. hàng	𠵼 (18) / 𠵼 (5)	義符：谷 声符：香 (漢越音: hương)	意味：谷
d. năm	𠵼 (14) / 𠵼 (1)	義符：年 声符：南 (漢越音: nam)	意味：年
e. nằm	𠵼 (6) / 𠵼 (1)	義符：臥 声符：南 (漢越音: nam)	意味：横たわる
f. nhiều	𠵼 (42) / 𠵼 (3)	義符：多 声符：堯 (漢越音: nhiều)	意味：多い
g. ngay	𠵼 (10) / 𠵼 (2)	義符：正 声符：宜 (漢越音: nghi)	意味：すぐに
h. nửa	𠵼 (7) / 𠵼 (4)	義符：半 声符：女 (漢越音: nữ)	意味：半分
i. tên	𠵼 (105) / 𠵼 (6)	義符：名 声符：先 (漢越音: tên)	意味：名前
j. tên	𠵼 (7) / 𠵼 (1)	義符：矢 声符：先 (漢越音: tên)	意味：矢
k. vai	𠵼 (3) / 𠵼 (2)	義符：肩 声符：来 (漢越音: lai)	意味：肩
l. vừa	𠵼 (16) / 𠵼 (15)	義符：方 声符：皮 (漢越音: bì)	意味：ちょうど
m. lớn	𠵼 (66) / 𠵼 (3)	義符：巨 声符：吝 (漢越音: lạn)	意味：大きい

<上下の交替>

n. ghế	𠵼 (3) / {計*几} (1)	義符：几 声符：計 (漢越音: kέ)	意味：椅子
<その他>			
o. cửa	𠵼 (37) / 𠵼 (5)	義符：門 声符：舉 (漢越音: cù)	意味：門扉
p. ngồi	𠵼 (7) / 𠵼 (4)	義符：坐 声符：外 (漢越音: ngoai)	意味：座る

図：『嗣徳聖製字學解義歌』卷之二 18 と 18b を拡大したもの
 (近い位置に「鬻」と「統」の字形が同居していることが分かる)



鬻 羅鬻諾甫侯所封

Húra là tên nước Phù Hậu Sở phong 鬻とは甫侯の所領の国の名である

郝 羅統埒於勉諾齊

Thát là tên đất ở trong nước Tề 郝とは齊の国にある土地の名である

義符と声符の位置の交替は、写本と版本の違い、あるいは文書のレベル、内容にかかわらず普遍的に起こる現象であるといえる。そして、出現する回数の偏りから、どの形を多く使うかといった書き手の癖のようなものは見られるが、どちらの字形が正式であるといった決まりはないようである。一文書中あるいは一葉中(上図参照)、時には一文書中に、この種の異なった字形が同居することもある。

また、例えば、「足」、「火」、「才」、「木」、「辵」などを義符に持つ字形は声符との位置は交替していない。「駟」と「𨔵」、あるいは、「關」と「𨔵」の字形の交替という例外はあるが、もともと部首として漢字にあるものは、基本的には声符の左側に添え、位置も交替しないという傾向が指摘できる。

° 『嗣徳聖製字學解義歌』の事例 a については、漢字「𨔵:漢越音 chiên」を借りてベトナム語 chen を表した、仮借の字喃であり、「𨔵」と「毛」のそれぞれの要素はベトナム語の意味と音を表すための義符と声符ではない

4. 義符による同音異義語の区別

4.1 民間資料における義符の種類の変替

形声の構造を持つ字喃の中で義符の種類が交替する例には以下のようなものが見られる（義符の有無もあわせて示す）。

『長山遺禄』

a. trưóc	𨔵(𨔵)(8)/𨔵(4)	義符：先・前	声符：畧(漢越音：lưọc)	意味：前(に)
	畧(3)			
b. thẳng	𨔵(𨔵)(4)/𨔵(𨔵)(2)	義符：直・正	声符：尚(漢越音：thượng)	意味：真直ぐ
c. sang	𨔵(19)/𨔵(9)	義符：足・辵	声符：郎(漢越音：lang)	意味：行く
	郎(1)			
d. trông	𨔵(2)/𨔵(2)	義符：目・望	声符：竜(漢越音：long)	意味：見る
e. sau	𨔵(𨔵)(9)/𨔵(1)	義符：後・后	声符：婁(漢越音：lâu)	意味：後(で)
f. trong	𨔵(29)/𨔵(4)	義符：中・内	声符：竜(漢越音：long)	意味：中(で)

『西遊傳』

a. sang	𨔵(7)/𨔵(1)	義符：辵・足	声符：郎(漢越音：lang)	意味：行く
	郎(3)			
b. trong	𨔵(21)/𨔵(1)	義符：中・内	声符：竜(漢越音：long)	意味：中(で)

このように、民間資料においては、ほぼ同じ意味を表す義符同士が交替していることが分かる（『長山遺禄』：先/前(a), 直/正(b), 辵/足(c), 目/望(d), 後/后(e), 中/内(f), 『西遊傳』：辵/足(a), 中/内(b)）。従って、次節で見る『嗣徳聖製字學解義歌』の場合とは異なり、義符の種類を変えることによって意味の上での区別をする意識はないと考えられる。

4.2 『嗣徳聖製字學解義歌』における同音異義語の扱い

『嗣徳聖製字學解義歌』中の同音異義語を字形によって区別している例には次のようなものが見られる（[]内に示した数は、同音異義語に対しても字形を区別していない例）。

a. bay	翫 (36) / 𪗇 (3)	義符：飛	声符：悲 (漢越音：bi)	意味：飛ぶ
	鏹 (3)	義符：金	声符：悲 (漢越音：bi)	意味：鏹
b. bùi ^f	涪 (1)	義符：彳	声符：倍 (漢越音：bôi)	意味：埃のような
	培 (6)	義符：土	声符：倍 (漢越音：bôi)	意味：埃っぽい
c. dra	蘇 (5)	義符：艸	声符：餘 (漢越音：dur)	意味：漬物
	瓠 (15)	義符：瓜	声符：余 (漢越音：dur)	意味：瓜
d. đá	砵 (84) [3]	義符：石	声符：多 (漢越音：đa)	意味：石
	{𨮑+𠂔}(2)	義符：足	声符：𠂔 (漢越音：cá)	意味：蹴る
e. là	羅	仮借的用法	羅 (漢越音：la)	意味：～である
	羅 (1)	義符：糸	声符：羅 (漢越音：la)	意味：絹の一種
f. lông	鬮 (1)	義符：羽	声符：竜 (漢越音：long)	意味：羽毛
	毳 (56)	義符：毛	声符：竜 (漢越音：long)	意味：毛
g. may	蠶 (1)	義符：幸	声符：埋 (漢越音：mai)	意味：幸せな
	枚 ^g (1)	仮借的用法	枚 (漢越音：mai)	意味：幸せな
	緞 (1)	義符：糸	声符：枚 (漢越音：mai)	意味：縫う
h. năm	𨮑 (14) / 𨮑 (1)	義符：年	声符：南 (漢越音：nam)	意味：年
	𨮑 (14) [1]	義符：五	声符：南 (漢越音：nam)	意味：五
i. nghèu	𨮑 (3)	義符：危	声符：堯 (漢越音：nhiêu)	意味：危険な
	𨮑 (1)	義符：貧	声符：堯 (漢越音：nhiêu)	意味：貧しい
j. ràng	𨮑 (8)	義符：糸	声符：床 (漢越音：sàng)	意味：縛る
	𨮑 (6) / 𨮑 (2)	義符：光・火	声符：床 (漢越音：sàng)	意味：明るい
k. sâu	𨮑 (38) / 𨮑 (1)	義符：虫	声符：婁 (漢越音：lâu)	意味：虫
	𨮑 (11) / 𨮑 (14)	義符：彳	声符：婁 (漢越音：lâu)	意味：深い

^f bùi はここでは、「埃のような細かい」と「埃っぽい」という意味を表し、完全な同音異義語とは言い難いが、「涪」の方は、霜涪(mưa bụi: 埃のように細かい雨, 卷一 3b), 「培」の方は、至曉培暉導(trời gió bụi tối ngày: 夜に埃を巻き上げる風があること, 卷一 4a)という風に、それぞれ「霽」と「曉」を修飾する語として使われている。従って、義符を替えて区別することには意味があると考えられる。

『嗣徳聖製字學解義歌』中の字喃における字形の特徴

l. s ^{ông}	𧄗 (10)	義符：生	声符：弄 (漢越音：l ^{ông})	意味：生きる
	𧄗 (3)	義符：衣	声符：弄 (漢越音：l ^{ông})	意味：(衣服の)背
m. t ^{ên}	𧄗 (105) [1] / 𧄗 (6)	義符：名	声符：先 (漢越音：t ^{iên})	意味：名前
	𧄗 (7) / 𧄗 (1)	義符：矢	声符：先 (漢越音：t ^{iên})	意味：矢
n. t ^{rong}	𧄗 (56)	義符：中	声符：竜 (漢越音：l ^{ong})	意味：中
	沖 (15)	仮借的用法	沖 (漢越音：t ^{rùng})	意味：澄んだ
o. t ^{r^ong}	𧄗 (3)	義符：空	声符：弄 (漢越音：l ^{ong})	意味：空の
	𧄗 (1)	義符：雄	声符：弄 (漢越音：l ^{ong})	意味：雄の
	𧄗 (4)	義符：鼓	声符：弄 (漢越音：l ^{ong})	意味：太鼓

表に示したように、『嗣徳聖製字學解義歌』においては、同音異義語を表記する場合、字形（多くは義符）を替えることによって区別をつけていることが分かる。混同して使われている例もあるが、その形態素全体の出現数に対しては非常に少ない。

『長山遺禄』には、同音異義語の出現回数自体が多くないため、単純な比較はできないが、例えば、『嗣徳聖製字學解義歌』においては、「幸せな」という意味と「縫う」という意味をもつ *may* という形態素に対し、「幸せな」という意味では「𧄗」あるいは「𧄗」を、「縫う」という意味では「𧄗」の字形を用いており（事例 g）、逆になることはない。一方、『長山遺禄』では、文脈上明らかに「幸せ」という意味で「𧄗」の字形を使っている例がある。

差唐僧 躑西竹裊經

Sai Đ^ung T^ãng sang Tây Trúc l^{ây} kinh (上帝は)彼を天竺へお経を取りに遣わされた

庄𧄗退准妖媼

Ch^ảng may g^ặp ch^ốn y^êu t^ình 運悪く妖怪変化の住処に行きつき

陷僧戒扒柴啞𧄗

Gi^{ám} T^ãng Gi^ói b^át th^ày ăⁿ th^ịt 妖怪は悟浄八戒を閉じ込め、三蔵を捉えて食べてしまった

『長山遺禄』35a 「大聖本路」

前節でみたように、民間資料においては、特に意味もなく不規則に義符の種類の変換が起こるのに対して、『嗣徳聖製字學解義歌』では、義符は明確に意味を添えるという役割が意識されており、同音異義語のかなり細かい区別にまで有効に運用されていることが分かる。

5. 俗字と正字

仮借および形声の字喃の義符と声符の字形について『長山遺禄』と『嗣徳聖製字學解義歌』において一方が正字，一方が俗字である語を挙げると次の表ようになる。

表：『長山遺禄』と『嗣徳聖製字學解義歌』における，仮借と形声の字喃の義符および声符の字形の対照表

	『長山遺禄』	『嗣徳聖製字學解義歌』
là	𠵼	羅
vè	術	衛／衛
một	𠵼／沒	沒
muốn	悶	悶
mười	𠵼	𠵼
cây	核	核
ngi	𠵼	𠵼
sóm	𠵼／𠵼	𠵼
mình の義符「命」	命／𠵼	命
cửa の義符「門」	門／𠵼	門
mở の義符「開」	𠵼 (𠵼)	開 (𠵼)
gió の義符「風」	𠵼	風
chân の義符「眞」	眞／眞	眞
bay の義符「飛」	飛／𠵼	飛／𠵼
義符「𠵼」	𠵼／豆／𠵼	𠵼
tuổi の義符「歳」	𠵼	歳
cửa の声符「舉」	舉／𠵼	舉
nước の声符「若」	若	若
gọi の声符「會」	會／會	會
声符「𠵼」	𠵼	𠵼
trụ の声符「留」	留／𠵼	留／𠵼
sau の声符「婁」	婁	婁／婁
ra の声符「羅」	𠵼／{𠵼*大}／{𠵼*去}	{𠵼*大}／羅
漢語 đức	𠵼／𠵼	德
漢語 quan	𠵼／官	關
漢語 loại	類	類

一見して、『長山遺禄』の方が仮借の字喃、あるいは、義符と声符の字形について複数の字形を使っており、また、いわゆる俗字・略字の使用が多いことが見て取れる。例えば、la を表記する際に、『長山遺禄』・『西遊傳』においては、全て「𠵼」の字形で表される。一方、『嗣徳聖製字學解義歌』においては、例外なく「羅」の字形が用いられる。また、「～について」あるいは「帰る」という意味をもつ vè について、『長山遺禄』・『西遊傳』においては、全て「術」の字形を使うのに対して、『嗣徳聖製字學解義歌』では、「衛」およびそれに記号を付した「衛^レ」の字形で表される。数の「一」を表す môt についても同様に、『長山遺禄』・『西遊傳』においては、「𠵼」、あるいは「𠵼」であるのに対して、『嗣徳聖製字學解義歌』においては、全て「没」で統一されている。

また、形声の構造をもつ字喃の義符および声符の字形について、例えば、「風」という意味の gió を、『長山遺禄』では、「𠵼」という、義符である「風」を略した字形を用いているのに対して、『嗣徳聖製字學解義歌』においては、例外なく「風」の部分省略をしない「𠵼」の字形を用いる。

また、3章の分類表で見たように、『長山遺禄』や『西遊傳』においては、「門扉」を意味する cù の表記には、𠵼 / 𠵼 / 𠵼 / 𠵼の四種類（『長山遺禄』）と、𠵼 / 𠵼の二種類の字形（『西遊傳』）があり、義符「門」にも声符「舉」にもそれぞれ俗字体である「𠵼」と「𠵼」が使われていた。その一方で、『嗣徳聖製字學解義歌』では、「𠵼」と「𠵼」の二種類の字形が使われており、義符と声符の位置の交替はあるものの、それぞれの字形にいわゆる「俗字」は使われていない。また、「飛ぶ」の意の bay について、『嗣徳聖製字學解義歌』は、「𠵼」あるいは、「𠵼」の字形を用いるのに対し、『長山遺禄』では、「𠵼」と表す。つまり、『嗣徳聖製字學解義歌』においては、「𠵼」の「𠵼」の部分省略されないのである。

最後に、表には、「徳」を「𠵼」の字形で書いた例を挙げたが、『長山遺禄』には、漢語が俗字で表記されることが非常に多い。例えば、「無」を「𠵼」、「聖」を「𠵼」とする等の例が散見される。

このように、いくつか例外はあるが、『嗣徳聖製字學解義歌』においては、仮借・形声の字喃の各要素となる漢字の字形を極力統一し、「俗字・略字」の使用を避けようという意図が見られる。その結果、「𠵼」や「𠵼」といった、出現回数も多いのに、煩雑な字形をその都度使うことになることも厭われないようである。そこには「正字」（あるいは煩雑な字形）への志向と「俗字・略字」への忌避意識が感じられる。その一方で、『長山遺禄』および『西遊傳』にそういった意識は感じられず（極力簡単な字形で書こうという方向で統一されている訳でもない）、特に『長山遺禄』においては、義符の字形に正字・俗字を問わず、複数の形が現れることが多く、その場その場で書き手が思いついた字形を使っているという印象を受ける。

このような差が生まれる原因として、多くの読者を想定した文書（『嗣徳聖製字學解義歌』）とそうでない文書（『長山遺禄』）ということが大きいかも知れないが⁵、『西遊傳』にも多くの俗字が使われ

⁵ 先に触れた、同音異義語に対し同じ字形を用いる、といった例で見たように、劇の台本である『長山遺禄』では、用いられる文字が同音であれば、文脈上での意味とその文字が本来表しているはずの意味の乖離に無頓着な面が見

ているため、文書の作成主体と内容も関係している可能性がある。つまり、官製の辞書と、在野の知識人による民間文学という文書の性格の違いという事である。文書の正と俗という性格が、字形の正と俗という形で表れているということもできるのではないだろうか。

ベトナムにおける「俗字」と「正字」については、中国におけるように定まった基準がある訳ではない。従って、『長山遺禄』に使われている字形が「俗字」であるとは言えない訳であるが、今後このような比較を通してベトナムの異なる社会階層に属する知識人たちの使う字形の違いを明らかにすることにより、彼らの「正字」、「俗字」の境界線が明らかになってくるのではないだろうか。

6. 結論

以上の考察から、以下の三点が結論として導かれる。

まず、3章で見たように、形声の構造を持つ字喃の義符と声符というそれぞれの要素の位置の交替は、民間資料においても『嗣徳聖製字學解義歌』においても共通して見られる字形の特徴であった。そして、位置が交替したそれぞれの字形については、意味の違い、用法の違いはなく、またそれが文書中の近い位置に同居していても何ら問題とは意識されなかったということが明らかとなった。また、そのことは、義符の有無についても同じことが言える。

次に、民間資料においては、義符の交替が特に意味もなく、不規則に起こるとは対照的に、『嗣徳聖製字學解義歌』においては、同音異義語の区別のために義符が交替する例が多く見られた。これは、義符が当該文字が表す形態素の意味（あるいはその意味が属する範疇）を表す役割をもっていることがより強く意識されている。

最後に、仮借の字喃、および形声の字喃の義符と声符の字形について、『嗣徳聖製字學解義歌』においては、極力「俗字・略字」の使用を避けようという意図が見られる一方、『長山遺禄』や『西遊傳』には、俗字・正字の区別なく書き手の自由に字形の交替が行われていた。そこには、確かに「正字」と「俗字」という区別があり、書き手、特に官に近い側にそれを区別する意識があったのではないかと推測される。

られる。それは、例えば、「関公」Quan Công という人名を、同音の「官公」Quan Công と表記する、あるいは、「巴蜀」Ba Thục という地名に対し、同音とはいえ、字喃である数字の「三」を意味する「卅」を当てて「卅蜀」Ba Thục と表記するなどといった例に端的に表れており、義符が何種類も交替し、その交代に特に意味のないようにみえる点からも、この資料中における字喃が表音文字としての性格をより強く持っているものであるという印象を受ける。

文献

- 1) 伊澤亮介 (2019) 「伝統民間劇台本『長山遺祿』とそのチュノムの使用状況について」『日本漢字學會報』第1号、pp.1-20
- 2) Nguyễn, Quang Hồng. eds. (2006) *Từ Điển Chữ Nôm* (『字喃辞典』). Nxb Giáo Dục
- 3) Nguyễn, Tài Cẩn. (1985) *Một số vấn đề về chữ Nôm* (『字喃に関する諸問題』). Nxb Đại học và Trung học chuyên nghiệp
- 4) Nguyễn, Quang Hồng. (2008) *Khái luận văn tự học Chữ Nôm* (『字喃文字学概論』). Nxb Giáo Dục
- 5) Vũ Văn Kính. (2009) *Đại Tự Điển Chữ Nôm* (『字喃大辞典』). Nxb. Văn nghệ TP. Hồ Chí Minh Trung tâm nghiên cứu Quốc Học
- 6) Nguyễn, Tuấn Cường. (2012) *Diễn cách cấu trúc Chữ Nôm Việt* (『字喃構造の沿革』). Nxb Đại học Quốc gia Hà Nội
- 7) 清水政明 (2017) 「アジアのなかの漢字 ベトナム」, 沖森卓也, 笹原宏之他『日本語ライブラリー 漢字』朝倉書店
- 8) 伊澤亮介 (2018) 「ベトナムの民間における「西遊記」受容—水上人形劇の台本と『西遊傳』の分析から—」『EXORIENTE』vol.25, 大阪大學言語社會學會、pp.91-109

参考文献

- ・ 裘錫圭 (1993) 『文字學概要』 萬卷樓
- ・ グエン・ター・ニー (2004) 『ベトナムにおける17世紀から19世紀の漢字・チュノム手書き文書』在地固有文書研究班
http://repository.tufts.ac.jp/bitstream/10108/26284/1/cdats-hub5-15.pdf#search=%27%E3%82%B0%E3%82%A8%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%83%8B%E3%83%BC%27__ 閲覧日 2018/11/05
- ・ 周志鋒 (2006) 『明清小説 俗字俗語研究』 新华書店
- ・ 中野美代子 (2005) 『西遊記 (一)』 岩波書店
- ・ 福満正博 (2008) 「『宋元以来俗字譜』補正(1) —『古列女伝』—」『明治大学教養論集 通巻437号』 pp. 47-73
- ・ 西田龍雄 (1984) 『漢字文明圏の思考地図—東アジア諸国は漢字をいかに採り入れ、変容させたか』 PHP 研究所
- ・ 劉復共, 李家瑞 (1930) 『宋元以来俗字譜』 中央研究院歷史言語研究所
- ・ Kiều, Thu Hoạch. eds. (2014) *Truyện Nôm Bình Dân* (『民間字喃物語』) quyển 1, quyển 3. Nxb Khoa Học Xã Hội
- ・ Shimizu, Masaaki. (2015) A Reconstruction of Ancient Vietnamese Initials Using Chữ Nôm Materials (「字喃資料を用いた上古ベトナム語頭子音の再構」). *NINJAL Research Papers* 9: 135-158, National Institute for Japanese Language and Linguistics
- ・ 『西遊傳』 Nom foundation <http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/52/> 閲覧日 2018/11/14